

今日の「閉塞感」に思うこと

まったくの私的感情と感慨にすぎないことをお断りしてから僭越なことを言うのですが、わたしは臨床家ですから仕事は個別的で（聴衆たった一人の生演奏のようなもので、「真の」業績は紙上には残らず「客観的」に他が知ることはない、わが社会は客観的評価システムを持ってない）、かわりに結果を逐一直視でき責任は直接的です。人々が病気になるときの自分の疾病にたいする行いも紛れもなく直接的です。その点、行政人や教員の仕事は畢竟間接的と思われまふ。そういった経験のためか、わたしはおしゃべりをたやすくは信じません。過去の行為（その局面で何をしたか）だけが人間の表現と思えます。己の過去に裏打ちされていないおしゃべりは数知れないでしょう。むしろ背反する過去であったかも知れまふ。わたしは、審議会、委員会、調査会、研究会などというものに落胆もしていません。是認できなくても、これがわが社会と思っています。「学問のすすめ」と裏腹に福沢諭吉は晩年にとうとう「分からん奴がわるいのだ」と敗北宣言したそうですし、中世のカトリック巡察師ヴァリニャーノは当初礼賛した日本を後年には罵倒しましたが、民族の精神はそれなりに必然の歴史があったのですから（個人の人格が形成されるのと同じ事ではないか？）、たちどころに変わりようはないと思うのです。

卑近な「教育」についても、システムの勘案作成は、過去に「教育行為」とは疎遠の列に並んだ人たちに委ねられもするので、結局堂々巡りのジレンマが当面（2世代くらいが死に絶える50年のスパン）ついてまわります。（医師インターン制度も、精神も慣習制度も、つまり前提そのものが違うわが社会へ戦後アメリカから直輸入されたが無惨な終末を迎えた）。一般的な意味での「教育行為」は、知識・技術のように文字や講演や実技で伝達可能、従って訓練で習得可能な事柄の「教育行為」です。しかし真の意味の教育は「育成」なので訓練習得出来る類ではなく、状況のなかでひとりでの養われるものと考えまふ。研究者や医師、親や国民としての思想やモラル（社交道徳の意味ではない）の類です。個人・民族の人格のレベルで後代に養われてゆく類です。言行は一致する／本音と建て前、異質を許容する／しない、失敗を恐れない／恐れる、挫折を寛容する／しない、などなどは、このレベルの「教育」の所産と思いまふ。これらが、「教育行為」の「訓練技術」（ましてやおしゃべりで）で習得されるとはとうてい思いまふせん。度々のつまり、自分のグラウンド（わたしは公的には医学診療と私的には誰もの手にある子育て）で「自分の地肌と腕力（実力）」のままに譲らずプレイして（怒号と投石もある）賽の河原に石を積みながら後継の広がり待つよりほかに手だてを見出せ

ない、そして「滅びるなら滅ぶもやむなし」というのが何年か前からの不遜な感慨です。

(2000.10.16)